

スunksのはなし（第二話）----- 分類の続き

名古屋大学名誉教授 鬼頭純三

今回は分類の話からやや脱線してしまいましたので、もう一度分類についてまとめておきます。分類の基準は、最初はその外形、生態、内部形態などを基準にして決められ、次いで交配できるかどうか、交配したときその子供が妊性を持つかが調査され、多くの書き換えが行われました。やがて染色体の解析が進むにつれて、染色体の数、形などによって分類の見直しが行われてきました。近年では、DNAの塩基配列の解析技術の進歩により、同じ種内の変異が詳しく調べられるようになりました。食虫目動物の特徴として、かつて掲げられた「原始的な特徴を持つ動物である」という基準は、あまりにも曖昧であって動物学的とは言いかねるものです。そのために「便利な物置」になってしまったという歴史があります。

今泉・小原（前出）は、食虫目に次の5つの上科を分けています。

- ・テンレック上科 中米、西アフリカ、マダガスカルに産し、ソレノドン科（中米）、ポタモガーレ科（西ア）テンレック科（マダガスカル）の3科を含む。
- ・キンモグラ上科 アフリカに住むキンモグラ科だけ（いわゆるもぐらではない）。
- ・ハリネズミ上科 欧州、アフリカ、アジアに分布し、ハリネズミ科だけ（ハリモグラは卵を産んで袋で育てるカモノハシに近い動物です）。
- ・ハネジネズミ上科 アフリカ産でハネジネズミ科だけ。
- ・トガリネズミ上科 アフリカ、欧州、中・北米、アジアに広く分布しトガリネズミ科とモグラ科に分ける。

スunksの形態を観察して、マウスやラットとは著しく異なり「なるほどこれが食虫目動物なのか」などと早合点してしまう特徴を2、3取り上げて、これらの上科に当てはまるかどうかを見てみましょう。

- ・恥骨が左右結合せず離れている.....トガリネズミ上科だけ。
- ・骨性の鼓室が形成されない.....キンモグラとハネジネズミ科では形成される。
- ・頬骨弓（ホホボネ）がない.....トガリネズミ上科の1部のみ。テンレックとジネズミの1部は不完全に形成される。
- ・盲腸がない.....ハネジネズミ上科だけには存在する。

細部の構造やニッチェ、生態などを比べると多様性はもっといろいろあるわけで、食虫目の分類が混迷するのも宜なるかなと思われれます。

キンモグラは、姿形も生態もモグラにそっくりで、眼球や耳介が退化しているところまで同じですが、モグラには関係なく、歯とかその他の内部構造からテンレック上科に近いとされています(図6)。スunksの和名「ジャコウネズミ」は、しばしば他の動物と間違われるのでご注意ください。それは、北米に生息する大型の齧歯類に「musk rat」と呼ばれる動物がいるからです。シートンの動物記には銀狐ドミノの物語に登場します(瀧口直太郎訳:シートン動物記 第3巻 評論社 初版1959)。ここではドミノとジャコウ鼠と書かれていますが、すてきなイラストからそれが musk rat であることが分かります(図7)。これらは文献を呼んだり論文を書いたりするときに、勘違いしないよう注意したいところです。

ところで皆さんは、これら食虫目動物を動物園で見られたことがあるでしょうか。よほど比較動物学に興味のある人でない限り、探す努力もされないのではないのでしょうか。前回、恐竜の王国であった中生代に、ほ乳類はウサギより大きくはならず、ひっそり暮らしていたと申しあげましたが、ほ乳類の王国となった新生代になっても、食虫目はそのままの暮らしを続けているようです。ソレノドンやハリネズミでもウサギより大きくはなりませんし、色も地味で姿形はドン臭く、多くは夜行性で並べると、ディスプレイには全くインパクトがない動物であるといえるでしょう。しかし、結構身近にいて知られていたということは童話などに登場することからもうかがえます。

私は全く文学に詳しいわけではありませんが、グリム童話やポーランド昔話にハリネズミが出てくるのを思い出します。グリム童話では(岩波少年文庫38、10版1961)横に曲がった足を持ったハリネズミ夫婦が、それを馬鹿にしたウサギに知恵を巡らせて駆けっこをして勝つお話で、「どんなに身分が高いとうぬぼれても卑しいつまらないもの——たえそれがハリネズミであったとしても——笑い者にしてはならないこと」を教訓としています。ポーランド昔話(かみじょうゆみこ訳 福音館 初版1966)では、子供に恵まれない百姓の夫婦が、ハリネズミの子を拾って育てます。いろいろあってハリネズミはお姫様と結婚することになるのですが、そのとき、魔法が解けて立派な青年になりめでたしめでたし、というお話です。どちらもハリネズミは卑しい、身分の低い、見苦しい人の象徴とされています。日本では、故椋鳩十氏の「2年生の童話」(椋鳩十作、多田ヒロシ絵 理論社)に「ジネズミの親子」というお話が出てきます(これは名古屋大学文学部の辻敬一郎教授——現副総長——に教わり、コピーを頂きました)。ここにはキャラバンの様子が生き生きと書かれています(図8)。「大人も親ゆびほどの、動物です。……もぐらににているが、もぐらではありません。ねずみにもにているが、ねずみでもありません。……もぐもぐとみみずをたべているのです。……おかあさんと思われる大きいのが、ちよろちよろ

歩くと、いちばん先とうにいたのが、おかあさんのおしりに、ひたっとあたまをくっつけるのです。二番めのは一番めのおしりに、というように、つぎつぎに体をくっつけ合って、一列に並んで、歩き出したのです。……（鳩十さんは動物園で好きな物を教わってあげるのですが……）えさを見つけた時だけ、れつをくずして、ばらばらになるのです。（ある日大きなアオダイショウが現れます）じねずみもへびに気づいたようでした。じねずみのおかあさんは、ほそい、ほんとにほそい声で、ちいちいと鳴きました。と、一れつにならんでいたじねずみは、おどろくほどのす早さでばらばらにちって、べつべつのほうこうへ、ちょこちょこと走りさりました。……」。辻先生は、生前の椋鳩十氏とご親交があったようで、これはスunksのことではないかと質問されたそうです。鳩十さんは「実は観察したのはジャコウネズミでした。しかし文章にするときジネズミのほうが言葉の響きが良いのでジネズミにしてしまいました。大学の先生は厳密に考えるのですねー」といっておられたそうです。

最後に極めつけの写真をご紹介します。これは、名古屋大学農学部の並河鷹夫教授が、スunks調査と採集にカトマンズへ行かれたときの写真です。

（図9、成長；32巻15頁）。この図には次のような説明がついています。「ガーネジュ（ヒンズーの象神）寺院の前に置かれたツツンドラ（スunks）の像。この無害な動物ツツンドラはガーネジュの第一の友達のこと、ネパールの大・小寺院でよく見かける」。